

# 比較文明論の観点からみたキリスト教世界の類型化の試み

千葉大学 加藤隆

同志社大学 一神教学際研究センター  
2005 年度第 2 回「一神教の再考と文明の対話」研究会  
2005 年 7 月 23 日 (土)  
会場：同志社大学東京オフィス 大セミナールーム  
東京都千代田区大手町 2 丁目 6 番 2 号  
日本ビルヂング 5 階 566 区

## 00 導入

### 01 前提的な指摘

- ・特性と類型
- ・パトリオティズムの問題
- ・「神的現実を考慮した五つの社会類型」
  - 上個人主義下共同体主義社会 (西洋型)
  - 上共同体主義下個人主義社会 (中国型)
  - 共同体主義 1——柔軟な全体 (ホリスティック) 共同体 (日本型)
  - 共同体主義 2——社会機能別の固定的諸共同体の相互依存による共存 (インド型)
  - 共同体主義 3——社会全体についての客観的原則による共同体統治 (ユダヤ・イスラム型)

### 02 キリスト教世界の類型

- a ユダヤ教の成立からキリスト教の成立
- b 基本的な西洋型社会とその危機
- c キリスト教と西洋型社会の融合——中世的安定
- d 科学技術と近代西洋社会

### 03 二重構造の諸相

- a キリスト教世界の二重構造
- b 近代西洋社会の二重構造

### 04 「最高存在」以来の西洋的な近代世界における「宗教的立場」

# キリスト教における正典的解釈の可能性（レジュメ）

——土の器としての正典——

同志社大学 石川 立

近代聖書学の成果が教会に比較的影響力を及ぼしていると思われる欧米と日本のプロテスタント教会の事情を考えて——

（カトリックとプロテスタントでは正典の範囲が多少異なっていて話を複雑にするので、ここでは主にプロテスタントを念頭において論じる。また、「旧約聖書」という表記は本来適切ではないが、ここではキリスト教の中の議論にかぎるので、便宜的にそれを用いる）

## ●問題設定

キリスト教会は旧新約聖書を「正典」としている。しかしながら、聖書の「正典性」は今日、概して、その内実を失っているように見受けられる。すなわち、旧新約聖書が「神の靈感によって成り、キリストを証し、福音の真理を示し、教会の依るべき唯一の正典」として機能しているとはかぎらず、また、聖書が「聖霊によって、神につき、救ひについて、全き知識を我らに与える神の言葉にして、信仰と生活との誤りなき規範」として活用されているようにも必ずしも見えない。

このような事態に至った理由として、教会と聖書そのものの權威の失墜、および、それに並行して進行してきた啓蒙主義に基づく聖書学の発展が考えられる。

発表者は、現行の旧新約聖書の「正典性」に意義を見出そうとする立場に立つ。ただし、教会や聖書の權威を復興させてそれに頼ったり、信仰告白の有効性を主張してそれに立脚したりすることはしない。—キリスト教信者・求道者として、「正典」としての聖書を要求したい。

## ●「正典」の失墜

近代の聖書学の主流は歴史 - 批評的研究に依っており、方法論として、様式史、伝承史、編集史的なアプローチを実行する。聖書の大部分は伝承の集まりと言えるが、この方法は、聖書本文を伝承単位（もしくは文学単位）に分割し、その伝承のよって来たる「生の座」を推測する。編集史は伝承が現行の聖書本文に落ち着く過程に注目する。編集史はいくらか総合的ではあるが、歴史 - 批評的研究の基本的な作業は本文を分解・分析することである。

この方法は宗教史学派の系譜に属すると言ってよく、その根底には、啓蒙主義が厳然と横たわっている。啓蒙主義はキリスト教会に反対する立場であり、神学を排除し、信仰、聖霊、靈性（スピリチュアリティ）、神などを「学問」「研究」の領域に入れないか、入れるとしても歴史化・合理化して入れようとする。

歴史 - 批評的な研究に従えば、「正典」は承認されることが難しい。とりわけ新約聖書の「正典性」を論じた議論の多くは、否定的な結論を持つ。その主張点は次の通りである（新約聖書に限っても）。

①聖書は多様な伝承、様々な思想が集められたものであり、ひとつの「正典」としてまとまりえない。

- ②「正典」が規範というならば、聖書以外に、初代教会の思想に染まらない元来の思想により近い書物があるし、これからも発見される可能性もある。現在の聖書の編集は不完全であり、規範とはなりえない。
- ③聖書の書物の選択は異端排斥のためのイデオロギーに基づいている。
- ④新約聖書は旧約聖書を真に理解することを意図せず、これを恣意的に解釈して自らを権威づけようとしている。

以上の理由などから、正典成立のころは意味があったであろう「正典の使命」は、今日ではすでに終わっていると主張する者もいる。

新約聖書の「正典性」が危ぶまれているのに、旧約聖書と新約聖書をなおひとつの「正典」と見なしていこうとする試みは今や問題外の感がある。

### ●素朴な立場——キリスト者・求道者の要請

聖書は教会の中にある書物である。教会で用いられ、信徒によって読まれる（ここで「教会」というのは、教会の組織というよりは「『救済』を求めて聖書を読む読者の集まり」の意味で用いる）。聖書の「正典性」は教会というコンテクストにこそある、と言わねばならない。信仰を継承するときに、教会は「正典」を必要とする。また、『救済』をもとめて聖書を読もうとする者は「正典」としての聖書を必要とする。「素朴な読者」——聖書の現場！——には「証言のまとまり」が必要である。

ところが、聖書の「素朴な読者」から見ると、「正典」否定の現状は、「賢い」啓蒙主義研究者が一人ひとりの信者や求道者（＝教会）から「正典」としての聖書を取り上げ、占有して解体しているように見える。

### ●「正典」批判に対する疑問

そもそも、「『救済』を求めて聖書を読む読者」と聖書研究者とは聖書を読む目的が違う。すなわち、次元が違う。目的や次元が違えば、読み方も異なり、見え方も相違してくる。

歴史 - 批評的な方法は極めてすぐれた業績を残してきたし、これからも多くの成果をあげていくことだろう。しかし、それによって聖書にまつわる膨大な情報や解説が提供されたが、そのことが即、聖書そのものの解釈と理解にはならないことに注意しなければならない。聖書を理解するとは、様々な有益な情報に目配せしつつも、そこを一步踏み出す作業だからである。聖書を「『生きる』ことに関わる書」として読む者は、諸々の解説の渉猟からテキストそのものに再び立ち帰り、読者の心身と人生を総動員して、テキストに総合的に立ち向かう必要があるのではないか。それが可能になるためには、キリスト教を伝える側から或るまとまったテキストが読者に与えられていなければならない。

以下、正典批判と歴史 - 批評的研究に対する疑義を箇条書きにする。

- ・ 歴史 - 批評的なアプローチは啓蒙主義、合理主義に基づいている。啓蒙主義の最も大きな欠点は、自らを問わないということである。
- ・ 「正典」批判が教会批判の一環となっている。
- ・ 聖書本文の分解・分析だけでは意味は見えてこない。総合的に見る必要がある。コ

ンテクストが重要ではないか。単語でさえも、辞書的な意味で終わることはありえない。コンテクスト（文脈）の中で始めて独特の意味を持つ。同じひとつの単語の意味は、厳密に言うと、用いられる文脈によってすべて異なる。伝承レベルではなおさらである。

- ・ 読むという行為には読者の生き方や考え方が関わる。聖書を読む目的によって解釈は異なる。聖書を読む目的まで含めて聖書は吟味される必要がある。

上記『『正典』の失墜』の項の「正典」に対する否定的な主張に対しては、次のような見解を返したい。

①多様性について。様々な思想、多様な伝承は、シンフォニーのイメージで統合することができる。聖書は神学的に単一ではないし、そうである必要もない。

②「正典」には必ずしも最上の書物が入れているのではない。「正典」はただの寄せ集めではなく、各書物は「正典」というコンテクストに入れられたときに、有機的に関連し合うようになった。その意味でそれぞれは掛け替えのない書物なのである。醸成のイメージ。また、「正典」は「規範」であるが、「規範」と言っても、教えを固定化させるための教義なのではない。解釈の仕方は規制されていない。解釈の可能性は開かれている。しかし、むしろ解釈の可能性を広げるためにも、無限にある書物を限る必要がある。解釈を繰り返し広げるための土俵のイメージ。

③④については、きわめて重要な証言を守るため、と答えたい。「異端排斥」「旧約聖書の曲解」と言えば聞えは悪いが、同じ事態を別の面から見れば、これは「まったく新しい事態」「きわめて伝えにくい喜ばしい事態」「守らねば一笑に付されかねない事態」の証言を守るための懸命な（傍から見ると時に頑なで滑稽な）工夫と言えるのではないか。

#### ●聖書の「正典性」の積極的な意義

「正典」に真理が含まれるとしても、この容器は人間の作ったものであり、所詮「土の器」である。したがって、現行聖書を「正典」として保持する積極的な理由を挙げることは案外難しい。

すでに述べてきたことと重なるところもあるが、そもそも「正典」というものが存在すること、そして現行の聖書内の書物が閉じた「正典」として与えられていることの積極的な意義を箇条書きにする。

☆ キリスト教の歴史の中で、「正典」は議論の土俵であると言える。この土俵に立つ限り、自由に立ち振る舞うことが許されるし（反則もありうるが）、過去の教会の先輩たちと議論することもできる。与えられたテキストがないと、そもそも議論が出発しない。伝統的に基準となるテキストが残されていることは幸いである。

☆ 「正典」として「閉じる」ことによって、各書、各文学単位相互のキーワードやイメージの関連、またモチーフの関連などが生まれ、内部に新たな世界が現出する。旧約聖書と新約聖書がひとつの作品の中に閉じ込められることによって、両者の間にも新しい相互の関連が生じる。

☆ 「正典」として文脈が閉ざされ、配列が決められたことによって、各書、各部分は

新しい意味を担うことになる。実際、ユダヤ教の「正典」とプロテスタントの旧約聖書とは同じ書物を含むが、配列が違うゆえに意味合いは異なる。

☆ 聖書が「正典」として読者に提示されていると、全体を物語として読むことが可能になる。また、分析的でなく、総合的に読むこともできるようになる。歴史資料を提供する情報言語ではなく、詩的・宗教的言語として読み、味わうこともできる。

以上のアプローチは、最近の詩編研究から必然的に要請された読み方である。最近の詩編研究の成果は、配列、キーワードの関連に注目し、詩編さえも越えて、旧約聖書と新約聖書を含めた「正典」全体の意味空間の現出を見、その内側に響くシンフォニーを聞こうとしている。

### ●最後に

聖書を「研究」するだけでなく、これをひとつのまとまりとして（つまり「正典」として）「読み」、「黙想する」権利が読者にはある。宗教的な行為としての「読み」が認められなければならない。聖書の「研究」は様々な情報を読者に提供するかたちで、聖書の「読み」に仕えるべきである。「読む」のは読者である。

「正典」としての聖書は、教会と聖書の権威がなくなった今日では（日本社会ではもともと、そのような権威はない）、無残な姿をさらしている。確かに、それは欠けの多い「土の器」であるにすぎない。しかしながら、証言と真理を含んだ「土の器」だと信じられてきた。「不出来だ」と言ってこの「土の器」を砕けば、証言も真理も一緒に流れ出て失われてしまうのである。